

## 高齡者の世代間交流への参加実態と課題に関する研究

## — 韓国の社会福祉館を中心に —

○ 日本福祉大学大学院 崔 恩熙 (008937)

キーワード：世代間交流，高齡者の参加実態，社会福祉館

## 1. 研究目的

韓国においては、少子高齢社会への急転換に伴う家族形態の変化や世代間の意思疎通機会の低下等から世代間交流の必要性が高まり、多くの社会福祉館において「世代間交流プログラム」が試みられている。しかし、世代間交流は高齡者の生きがいに効果的であるという指摘があるが、その効果の検証は十分になされているとはいえない。また、高齡者が世代間交流プログラムにどのような経緯や動機を持って参加し、どのような過程を通して効果に至ったかについても十分に検討されていない。

したがって、本研究は、韓国の社会福祉館で実施されている世代間交流プログラムを対象にして、世代間交流プログラムに参加する高齡者に焦点を当て、参加経緯や動機、そして効果に至るまでの内面的変化を明らかにすることを目的とする。なお、プログラム担当者は高齡者への効果を促すために、どのような取り組みを仕掛けているかをも同時に検討する。

## 2. 研究の視点および方法

2014年7月に、韓国のA市にある4か所の社会福祉館で行われた世代間交流プログラムに参加した高齡者4人には、①活動状況、②参加経緯、③記憶に残ったこと、④活動から得られたこと等について、そのプログラムの担当者である社会福祉士4人には、①機関や地域の特性、②プログラムが立ち上がるまでの経緯や運営等について、それぞれインタビュー調査を行った。得られたデータは、質的データ分析法(佐藤2008)を参考に分析した。

## 3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会「研究倫理指針」に基づき倫理的配慮を行った。具体的には、インタビューを実施する前に、①調査目的、②インタビュー内容をICレコーダーで録音すること、③個人情報の保護が厳守されること、④参加を強制するものではないことを書面にて説明し同意をえた。また、参加者の個人情報は、研究IDにより匿名化の配慮を行った。

## 4. 研究結果

主な研究結果としては、高齡者が世代間交流プログラムに参加する際には、担当者からの勧誘があったものの、プログラムへの参加決定要因として、「①若者に対する関心」もしくは「②プログラム内容に対する関心」が作用しており、これら2つの要因によって内面

的变化やプログラムの効果において相違点をみせていることが明らかになった。

まず、「①若者に対する関心」が作用した高齢者は、若者との情緒的交流を通して、「孫のような」「幸福感」を感じ、「積極的な活動への動機づけ」につながるということが分かった。継続的な情緒的交流は、高齢者と若者との「親しい関係」を形成し、次回に会うことに「期待感」を持たせていた。また、活動を重ねる度に「若者に対する愛情」が深まり、活動の中で「自分の役割」を認知するようになった。そして、若者への関心から始まった活動は、「一般の若者に対する関心」だけでなく、若者との関係から「若者の親との関係へ」と繋がったり、「地域社会内の交流へ」と広がりをみせたりした。

次に、「②プログラム内容に対する関心」が作用した高齢者には、若者との世代間交流から得られた満足感よりは、プログラムの中で担っていた（交流よりも）個人の役割を充実に遂行することによって得られた達成感や自信の方が高いという結果が得られた。つまり、積極的な交流はしていないが、若者との活動は肯定的にとらえていることを意味する。しかし、このような肯定感「若者に対する関心」を抱かせ、「情緒的交流の機会」に繋がったり、「積極的な活動への刺激」を与えた。また、同世代の構成員にも関心を持たせ、これは、新たな「関係形成」と「相互理解」を促進し、人間関係を豊かにしていった。

こうした結果の背景には、社会福祉館の世代間交流プログラムは社会福祉事業の手段的プログラムとして位置づけられ、その目的や交流方法、頻度、内容等について担当者がすべてを決めていたことが挙げられる。そのため、担当者の価値観が立ち上げるプログラムに強く影響を与えていた。しかし、担当者は、世代間交流またはプログラムについて他機関との情報交流はなされていないことが確認された。また、適切な評価方法がないため、高齢者の効果やニーズが次のプログラムに反映されていなかった。

## 5. 考察

以上の結果から、高齢者の世代間交流への参加は、若年世代との交流を通して高齢者の人間関係を豊かにし、情緒的な交流を生じさせることが分かった。その情緒的交流が活動を維持させる要因となる。特に、次世代への思いや関心の強い方が高齢期を幸せに生きる力があり、積極的な人生を送る可能性を高める。それを実現するには、高齢者と若者間の集団対集団の交流と個人対個人の交流を適切に組み合わせたプログラムが有効であると考えられる。また、社会福祉館の世代間交流プログラムの担当者は、プログラムを構成する際、交流の方法や密度を考慮する必要がある。なお、明らかになった効果やニーズを次のプログラムに反映できるよう、評価方法等を精緻化することも至急の課題である。

本研究は、韓国の社会福祉館における調査データに限定されており、他の地域や他の実施主体による世代間交流プログラムに対してまで一般化できるかについては検証が必要である。また、高齢者に焦点を当てているため、世代間交流の一部分の検証にとどまっている。今後、多様な実施主体によるデータや、若者世代も視野に入れた研究が求められる。